
ネコな一日

エンデバー

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ネコな一日

【Nコード】

N3679C

【作者名】

エンデバー

【あらすじ】

いつの間にか幽霊になってしまった俺。幽体離脱してしまっ
たそんな俺が、一匹のネコになり、一日を送る、ネコのストーリー！。

いつものように満員電車で揺られ俺は大学に向かう。通勤ラッシュの時間帯にあたるため、いつも満員なのだ。一本遅い電車だと、一時限目の講義には間に合わない。かといって、一本早い電車だと、講義までの時間が有り余ってしまったって暇で仕様が無い。小さな箱にぎゅうぎゅうに詰め込まれた中は、通勤途中のサラリーマンだの、通学途中の学生だの様々だ。そんな中に俺はいる。

今日も、いつもと変わらない、普段の何もないサイクルが続くのだろうと思っていた。満員電車で揺られ大学に向かう。大学での講義を受け、それが終われば電車で家に帰るといふ、至って平凡な日であると。

満員電車で揺られること二十分。電車は大同川という川の鉄橋にさしかかっていた。目的の駅まで、まだ四十分ある。

俺は揺れる電車の中でつり革をつかみながら、ゆったりと流れる川に目を向けていた。

突然身体が電車の進行方向に向かって強い衝撃を受けた。どん、と強く背中を押されたようで、踏ん張って止めることはできなかった。電車が急ブレーキをかけたようだ。

次の瞬間、俺の身体はふわりと軽くなった。身体から魂が抜けるかのような感覚。それも一瞬だった。気づけば、身体のおちこちから激しい痛みを感じていた。頭からは血が流れ出しているようで、額から頬にかけて流れ落ちてくる。身体は言うことを聞かない。全身が麻痺しているような感覚だ。

どれくらい痛みに耐えていたのだろうか、俺は意識が遠のいていく感じを覚えた。ここで意識を失ってしまったてはいけない。瞬間的にそう思ったが、身体は意思に反していた。視界が徐々に歪んで見えてくる。瞼は意思に反し閉じようとする。そして俺の意識は、スイッチを切ったようにふと途切れた。

気がついたとき、その場所がどこなのか一瞬わからなかった。少ししてから病院だということに気づいた。しかし、俺はあまりにも不思議な光景を目の当たりにしていた。これは夢だ、と自分に言い聞かせるように頭を振った。

ベッドで寝ているのは紛れもなく俺だった。周りを、大学の友達や家族の者や医師たちが取り囲んでいる。母は俺の手をつかみながらわんわん泣いていた。父はそっと母の肩に手を置いている。姉は今にも泣き出しそうな顔で俺を見下ろしていた。そんな彼らの後ろに俺は立っていた。

どうして俺が二人もいるんだ？ 様々なことが頭の中を巡る中、真っ先に出てきた疑問がこれだった。全く理解に苦しむ状況だ。

「おい、俺はここにいるぞ」

彼らの背中に向かって声をかけたが誰も反応しなかった。聞こえないふりでもしているのだろうかと思い、もう一度声をかけてみる。

「俺はここだ！ 誰か聞けよ」

先程より大きな声でいった。同じように誰も反応しなかった。

身体が異常に軽いように思えた。ふと思いついて、その場でジャンプを試してみた。不思議なことに身体はふわりと宙に浮いた。

「うわあ！ なんだこれ」

思わず声を漏らした。それでも周りの者には聞こえていないようだ。

俺はふわふわと宙を漂い、天井近くまで舞い上がった。徐々に身体をコントロールできるようになると、寝ている自分の頭上までやってきた。ここにきてやっと事情が飲み込めつつあった。

どうやら俺は、何らかの理由で幽体離脱をしてしまったらしい。ベッドで寝ている俺から魂が抜けてしまったということになる。おそらく、あの時電車で起きたことが原因なのではないだろうか。一体、あの電車で何が起こったのだろうか。

幽体離脱ということは、俺は死んではいないのだろう。今の俺は心肺停止状態か、遷延性意識障害、いわゆる、植物状態に陥ってい

ることだろう。いや、死んではいないのだから心肺停止状態ではないはずだ。

俺は寝ている自分に勢いよく突っ込んで行った。そうすれば戻れると思った。

しかし俺の身体は幽体の俺を拒んだ。身体に入ろうとした瞬間、何かに弾かれるような強い衝撃を受けた。もう一度同じように試みたが、結果は同じだった。

もう生き返れないのか、と思うと俺はがっかりと肩を落とした。泣きたいけど、涙さえ出てこない。

「亮輔、目を覚ませよ」

姉が沈んだ声でいった。いつの間にか姉は泣いていた。

俺は姉の後ろに立つと、肩に手を乗せようとした。しかし、俺の手はすりりと姉の身体をすり抜けた。幽体の俺にはなにもすることができない。

なにもできない俺は居心地が悪くなり、窓から病室を飛び出した。身体はふわふわと空を漂っている。大空に解き放たれた風船のように、いくあてもなく、ただ空をさ迷う空しい存在。今の俺にぴったりの表現ではないか。

どうせ生き返ることは無理なのだから、幽体で存分に楽しんでやるうと俺は開き直った。

身体を自在に操り、空をビュンビュンと駆け回った。雲を突き抜け、空高くから街を見下ろしてみる。

人が小さなアリのように見えた。アリたちはせかせかと街を歩き回っている。右往左往するアリたりはまるで働きアリそのものだ。都会のビル群は玩具の積み木のようにである。

突然後ろのほうから轟音が聞こえてきた。俺は振り返ってみる。

巨大な鳥が、轟音と共に物凄いスピードで俺に向かってくる。俺は避けることなく、ただぼつとそれを見ていた。巨大な鳥は俺をすり抜けていくと、何事もなかったかのように去って行った。

街へ降りようと雲を抜けた瞬間、路地裏をすたすたと歩いている

一匹の黒ネコを捉えた。ネコなどの動物には入れるのだろうか？

少し考え込んでから、黒ネコに向かって猛スピードで突っ込んで行った。身体はすっと、ネコの身体にとけ込むように入っていた。ネコの身体を乗っ取ることに成功した。意識は完全に俺のものだ。ただ身体がネコなだけ。入ることができたのだから、いつだって出ることできるだろう。

ネコの姿を借り、俺は歩き出した。慣れない歩き方に、俺の足取りは覚束無い。酔っ払いのおっさんみたいに、時折ふらついたりする。それでも、徐々に慣れてくると、走ることもできるようになった。ネコの身体は身軽で足も人間より断然速かった。

俺はふらふらと街をさ迷っていた。行くあてなどなにもない。

「安いよ、やすいよー。新鮮な魚をお昼のおかず、夜のおつまみにどうですか」

どこからか威勢のいい声が聞こえてきた。俺は知らず知らずのうちに、声のするほうへと歩みだしていた。

「美味しい新鮮な魚はどうですか」

帽子を被った、魚屋の店主らしき人物が、威勢のいい声を飛ばしていた。俺は魚屋に近づいていった。

「しっしっ。またお前か、こっちに来るな」

俺に気づいた店のオヤジは近くの箒を手にとると、俺を追い払うようにそれを振り回した。俺は少し距離をとった。どうやらオヤジの言い草からして、このネコは店の品を奪う常習犯らしい。

「お前なんかをお呼びじゃないんだよ。とっとと失せやがれ、この泥棒ネコが」

オヤジは俺を睨みつけながらいった。オヤジの言葉に腹が立った。昼も近く腹が減っていた。この魚屋から、一匹魚を盗んでやろうと決めた。盗んだからといっても、ネコなのだから犯罪じゃない。

(目に物見せてやる)

オヤジは警戒の色を浮かべ、依然として俺を睨みつけている。相当用心深いやつだ。くるりと魚屋に背を向け、俺はゆっくりと歩き

出した。

「奥さんどうです。今日の食卓にこの新鮮な魚を並べてみてはいかがですか」

オヤジは再び営業に戻ったようだ。ちらりとオヤジのほうを見やる。満面の笑みを浮かべながら、客と向き合っていた。当然のことながら、手に箸は持っていない。

心の中で笑いながら、俺は魚屋のほうに向かって駆け出した。

「あっ！ この泥棒ネコが」

オヤジは叫んだ。商品の秋刀魚を一つくわえ、少し走ったところで振り返った。オヤジは箸を持ち、怒りで顔を赤くしていた。

「あんのやるー。許さねえ。とっつかまえてやる」

オヤジは俺に向かって走り出してきた。ネコと人間、その足の差は歴然だ。本気で走ってもいけないのに、オヤジとの距離はみるみる離れていった。五十メートル程走ったところで、オヤジは諦めた。

生で食べる秋刀魚は不味くはなかった。むしろ、美味しかった。

生魚が嫌いな俺でも、ぱくぱくと食べられた。ネコの味覚が影響しているからだろうか。ともあれ、秋刀魚を平らげた俺は、それだけで満腹になった。散々走り回ったせいか少し喉が渴いていた。

ネコの俺はお金など一銭も持っていない。さてどうしたものか。どうやって飲み物を手に入れようか、思考を巡らせた。先ほどの魚屋のように、スーパーなどに入り込み、商品を奪うということは無理だろう。無難に考え、やはり、お金を手に入れるということが、先決のようだ。

思い立った答えが自動販売機だ。少し歩いたところで、自動販売機を見つけた。自動販売機の下に顔を突っ込んで見る。少しきつい自動販売機の下には、たまにお金が落ちてきているものだ。誤って落としてしまい、お金がその下に転がってしまふということがある。そうなると、手が届かなければ諦めるしかない。

奥のほうで、銀色に光る丸いものを見つけた。手を伸ばせばぎりぎり届きそうなところである。俺は力いっぱい手を伸ばした。それ

に手が届くと、ゆっくりと手繰り寄せた。銀色に光る丸いものは五百円玉だった。運のいいことに、最初の自動販売機でお金を手に入れることに成功した。

次に問題なのが、どうやってお金を投入するかだ。ネコの身体だと、到底投入口まで届かない。自動販売機の前を行ったり来たりして、俺は頭を悩ませた。なにか土台になるものがあればいいのだが……。

そう思いあたりを見回してみる。少し離れたところに、ダンボールが山積みになっているのを見つけた。それでは駄目だ。ダンボールだと、いくらネコの身体が軽くとも、乗ったところで潰れてしまっただろう。

その隣には粗大ゴミがいくつか捨てられていた。その中に、程よい大きさのパイプ椅子が捨てられている。それなら、俺でも運べそうだ。

パイプ椅子のところまで行くと、椅子の脚をくわえゆっくり後ずさりをした。倒さないように慎重にしなければならない。普段ならさっと運べるのだが、ネコの身体だとそうはいかない。小さな身体で足と口に力をくわえ、ずるずると引つ張る。時間はかかったが、なんとか投入口の下まで運ぶことに成功した。

五百円玉をくわえ、パイプ椅子にひょいと乗ると、手を自動販売機に当てやって立ち上がった。ちょうど投入口が正面にあった。五百円玉を投入してから、自動販売機を見上げた。買う物はミルクティーと決めていた。目的の商品は、一番上の右端にあった。ここから、ジャンプをすれば届きそうさ。

足に力を加え勢いよくジャンプした。ミルクティーの高さまで飛び上がった時、ひゅっと、手を伸ばしボタンを押した。ごとりとという音とともに、自動販売機から商品が落ちてきた。

さて、ここでまたしても問題が生じてしまった。商品をどうやって取り出すかだ。パイプ椅子から降り、俺は考え込んだ。ネコなのだから人間のように器用なことはいできない。

突然俺の横に大きな影が現れた。見上げると、四十代前半のおばさんだった。手には大きな買い物袋を持っていた。どうやら、買い物帰りのようだ。

「あんた、賢いネコだね」

おばさんは感嘆の声を漏らしながら、自動販売機から商品を抜き取った。

買い物袋から、小さなお皿を取り出すと、そこにミルクティーを注いだ。かすかだが、ミルクティーから湯気が立ち上っていた。

「ほら、飲みな」

おばさんはお皿を俺のほうに差し出した。

「それにしても、ほんと賢いネコだわ。誰かに教え込まれたのかしら」

再度、感嘆の声を漏らすおばさん。

人間が宿っているのだから、賢くて当たり前である。おばさんには、知るよしもないのだが、そこらのネコと一緒にされては堪らない。

俺はお皿に顔を近づけると、舌をミルクティーに当てやった。いかにもネコらしい。しかし、それと同時に舌に激痛が走った。

「あつっ！」

俺は叫び、思わず飛び上がってしまった。おばさんには、俺の行動はどう映ったのだろうか？

先ほどボタンを押したところに俺は目を向けた。そしてしまったと思った。ミルクティーにだけ、目を向けていたためか、重要なところに気がつかなかった。どうやら、ホットのほうのボタンを押してしまったらしい。文字通り、ネコは猫舌ということだ。

「あら、ホットは飲めないようね。ちょっと賢いだけで、熱いものは飲めないのね。やっぱりネコだわ」

俺の行動を見てか、おばさんはくすくすと笑った。俺はちょっとむっとした。しかし言い返すことはできなかった。いや、ネコだからできないのではなく、無理なのだ。

それに、ちよつとは余計だ。そこらのネコより断然賢いはずだ。いや、おばさんよりも賢いのではないか、と俺は思った。脳細胞が死滅しつつあるおばさんの頭より、大学生である俺のほうが、よっぽど知識豊富な頭ではないか。

おばさんは立ち上がると、自動販売機の前に立った。お金の返却口から三百八十円を取り出すと、百二十円を入れ、ミルクティーのコールドのほうのボタンを押した。残りの二百六十円は、ちゃっかりと自分の財布にしまっていた。俺のほうまでやってくると、お皿のミルクティーを捨て、新しくコールドのほうを注いだ。

このおばさんは一部始終を見ていたようだ。

(最初から見ていたんなら手伝えよな。お釣りだけ自分のものにしやがって)

俺は心の中で罵った。

ともあれ、おばさんのおかげで、喉を潤すことができた。お礼の意味を込めて、

「ニャー」

と笑顔(ネコだから、人間にはどう見られるかわからないが)でかわいらしい声で鳴くと、その場を立ち去った。

午後も昼下がりになってくると、雲行きが怪しくなってきた。空は分厚い雲に覆われ、今にも雨が降り出しそうな雰囲気だ。

ネコの身体に飽きつつあった俺は、そろそろこの身体を捨てようと思っていた。ネコの身体から離脱するため、意識を集中させた。外へ外へと、意識を追いやる。しかし、いくらやっても離脱できない。俺の意識はネコと同化したかのようで、離れる気配はなかった。それで俺は諦めた。

ちよつと不便なことはあるが、一生、自由奔放なネコでいるのも悪くはないなと思った。ネコの姿で学んだこともあるのだ。

人は時間に追われ、仕事に追われ、時として自分を見失ったりする。ストレスは溜まり、やりようのない怒りをどこかにぶつかけたりする。縦社会だの、つまらない人間関係だのは、無理やり作らされた虚空のなにもでもない。そんな息苦しさを覚える社会に人は生きていく。

しかしネコであれば、そんな息苦しい生活をしなくてもいい。現実逃避になるかもしれないが、自由奔放に、自分の思うままに行動ができる。自分を見失うこともない。縛られるものがないのだ。

俺は黒い雲を見やりながら、てくてくと歩いてきた。行き着いた先は小さな空き地だった。隅のほうに土管が一つあった。その中で一休みしようと、そこに向かって歩き出した。

土管に入ろうとした瞬間中から、ぎろり、と鋭く睨まれた。どうやら先行者がいたらしい。俺は数歩後ろに下がった。中から出てきたのは、俺と同じ黒ネコだった。

「なんだ、お前は？」

黒ネコが鋭い目を俺に向けたままいった。ネコ同士だと言葉を交わせるらしい。

「その土管で一休みしようと思ってな」

黒ネコの目を真っ直ぐ見つめていった。

「はあ？ ふざけるな。ここは俺の場所だ」

「場所なんて関係ない。とにかく俺は休みたいんだ」

「駄目だ。ここは俺の場所だ。お前はとつとと失せる」

黒ネコはそういい残すと、俺に背を向け土管に戻ろうとした。

「このブス黒ネコが。いいから、その場所を俺に譲れってんだ」

挑発してやった。すると、黒ネコは足を止め、ぴくりと耳を動かし振り返った。鋭い目を俺に向ける。怒りからか、黒ネコの顔は歪んで見えた。

「なんだと、このやる。調子に乗りやがって」

黒ネコはキレたようだ。全身の毛を逆立て

「ニヤァ」
と低く唸った。

同じように、俺も全身の毛を逆立て唸った。そしてじわじわと相手に、にじり寄り行って行った。周りから見れば、傍迷惑な二匹の黒ネコが、喧嘩しているように見えていることだろう。二匹の黒ネコの間には、一触即発の空気が流れる。

攻撃が当たるかどうか、微妙な距離になった時、黒ネコがネコパンチを放ってきた。俺はひょいとそれを避けた。

そして俺は一気に詰め寄って、黒ネコの顔面におもいつきりネコパンチを食らわせてやった。黒ネコは一瞬怯んだ。それを見逃さなかった俺は、さっと相手の背後に回り込むと、背中に飛び乗った。その後、背中に噛み付いてやり、ネコパンチの連打を浴びせた。勝負は呆気ないものだった。

「くっ、クソ。俺の負けだ。ここを譲ってやるよ」

黒ネコは観念したようだ。

「へっ、弱いな」

「いつか、ボコボコにしてやる。覚えてろよ」

黒ネコはくるりと背を向けると駆け出した。

「いつでもどーぞ。一生かかっても、俺には勝てないだろうけどね」
去って行く黒ネコの背中に向かっていった。

黒ネコを負かした俺は、土管の中に入り休むことにした。黒い空からは、ぼつりぼつりと、雨が降り出していた。雨は次第に強くなってゆき、ついには雷まで鳴り出した。俺は雨が止むまで、土管の中で休むことにした。身体を丸めて目を閉じた。

目覚めた時には、すっかり雨は上がっていた。どうやら、眠ってしまったらしい。大きな欠伸を一つすると、土管から這い出た。空には綺麗な虹が架かっていた。空き地を出ると、街のほうに向かって歩き出した。

街は人で溢れていた。皆が皆、なにかに急かされるように、すたすたと足早に歩いている。何人もの人が俺の横を通り過ぎて行く。

俺は場違いなところに来てしまったような、孤独感を覚えた。誰もが俺の存在には気づいていないようで、都会という街の存在が、ネコの存在を消し去るかのようで。ネコは下町がお似合いなのだろうか。

電気屋の前まで来ると、俺は足を止めた。俺の目は、商品であるテレビのニュースに釘付けになっていた。ニュースは列車の事故を取り上げていた。

そのニュースによると、今朝、大同川に架かる鉄橋へ電車がさしかかった時、鉄橋が崩れたというものだった。鉄橋は老朽化していたらしく、電車の重みに耐えられず崩れてしまったということだ。

電車は全部で四両。四両全てが川に落ち、一人が意識不明の重体で、他の者は全員死亡とのことだ。意識不明の一人とは俺のことだろう。しかし俺は死んだも同然だ。ネコの身体から抜け出し、幽体が俺の身体に戻らない限り、生き返ることはない。

幸か不幸か、なんとも複雑な心境だ。たまたま、俺が乗った電車が被害に遭ってしまった。そして意識不明とはいえ、生き残ってしまったのは俺だけだ。そんなことを思ってしまうと、他の亡くなった人に対して、申し訳ないという気持ちが入み上げてきた。

テレビから視線を外すと、とぼとぼと歩き出した。心なしか、足取りが重いような気がした。しばらく、ぼうつと歩き続けていた。

前を歩く、スーツを着たサラリーマンらしき人が、ぼいとなにかを投げ捨てた。それは煙草だった。まだ火がついていた。

マナーの悪いやつだなと思いつながら、俺は火を消そうと煙草を踏みつけた。同時に足の裏から熱を感じた。

「あつ！」

俺はネコであることをすっかり忘れ、つい癖で煙草を踏みつけてしまった。かわいらしいネコの肉球は、小さな火傷を負ってしまった。煙草を捨てたサラリーマンらしき人の背中を鋭い目で睨みつけた。

「あのやろ、許さねえ。恥さらしにしてやるぜ。ずれてんだよ、バ

「カ」

俺はオヤジの背中に向かっていった。無論、オヤジは気づかない。自分の不注意なのだから、八つ当たりのように思えるが、この際そんなことは関係ない。オヤジは頭を上手い具合にカツラで隠しているようだが、第三者から見ればすぐにわかってしまう。

（思い知らせてやるうじやないか）

魔が差したようで、俺はよからぬことをふと考えた。全く、ネコの姿を借りていれば怖いものなしでいられるというものだ。

俺はオヤジに向かって勢いよく駆け出した。素早くオヤジの股下に潜り込むと、そこでもいっきりジャンプした。頭突きが、見事にオヤジの股間にヒットした。オヤジは悶え苦しみながら座り込んだ。すかさず、頭の上に被さっているものを剥ぎ取ってやった。オヤジの頭は見事なバーコード禿だった。少し距離をとってから、禿オヤジのほうを見やった。カツラはその辺に捨ててやった。

「あのネコすげーな」

「ふふふ、面白いネコね」

「あいつすごいぞ。そこらのネコよりおもしれえー」

俺を見ていたらしい連中が、口々にいった。俺はなんだかいい気になつてきた。

「くそネコが」

禿オヤジは顔を真っ赤にして、俺を睨みつけた。

「ニヤー。ニヤー」

俺は嫌味つたらしく、挑発するように喉を鳴らした。

禿オヤジは顔を赤くしたまま、俺に歩み寄ってきた。しかし、俺は逃げないでいた。こいつを、もっとからかってやるうと思っただ。

禿オヤジは俺に向かって蹴りを放った。俊敏な動きで、ひらりとそれを避けると、素早く背後に回りこみ禿オヤジの尻に体当たりをしてやった。禿オヤジはふらついた。その瞬間、周りかどつと笑いが沸き起こった。

もう一度距離をとり、俺は戯けるようにして飛び跳ねた。

「このやるー。馬鹿にしやがって」

禿オヤジの顔はますます赤くなっていた。ネコに虚仮にされるのは、どれほどの屈辱なのだろうか。

再び禿オヤジははずかずかと近づいてきた。その時、ふと別のものが俺の目に飛び込んできた。

横断歩道を二人の子供が、楽しそうにお喋りしながら渡っている。ランドセルには交通安全の黄色いカバー。おそらく、小学一年生だろう。さらに奥からは、トラックが猛スピードで向かってきていた。赤信号だというのに、スピードの落ちる気配が全くなかった。運転手は気づいていないのかもしれない。

「余所見してんじゃねーよ、このくそネコが」

油断していた俺は、禿オヤジの重い一撃を食らってしまった。腹に激痛が走った。少し吹っ飛ばされたが、痛みを堪え態勢を整えようと、勢いよく駆け出した。禿オヤジの横をさっと抜けていく。

「逃げんな、くそネコ」

禿オヤジが俺に向かって叫んだ。それを無視して、二人のほうに向かつて走った。間に合うだろうか。トラックはたちまちに二人に迫ってきていた。

二人とも助けることはできない。どちらか、一人を選ばなければならぬ。どっちを選ぶ。俺が走りながら考えていると、隣に黒い影が現れた。それはあの時の、黒ネコだった。

「今は構ってやることはできない。後にしろよ」

俺は走りながらいった。

「わかってるよ。お前だけかっこつけて、死ぬってたんだ。お前が死んだら、俺のリベンジができなくなるだろ」

「お前死ぬつもりか」

「お前だって同じだろ。子供たちを助けるために死ぬんだろ」

「そっだ」

俺と黒ネコは二人のほうに向かつて走り続けた。間に合うか……。

トラックは二人の目と鼻の先にまで迫っていた。スピードは一向に衰えていなかった。俺はトラックの運転手を見やった。運転手はうつうつとしている。

俺はさらに加速し、小さな身体で男の子のランドセルに向かって体当たりした。黒ネコも同じように、隣の女の子のランドセルに向かって体当たりした。

間一髪、二人は車道から外れ、歩道に倒れた。しかし俺たちの逃げる時間はなかった。強い衝撃を受け、俺は宙を舞っていた。目が回り、世界がぐるぐる回る。

まさか、一日で二回も不幸なことに会ってしまったとは……。この後、俺はどうなってしまふのだろうか。俺の意識はふっと途切れ、全てが真っ暗になってしまった。

「……りよ……う……すけ」

どこからか、ぼんやりと俺の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。その声は聞き覚えのある声だった。俺の意識は暗闇の中だ。

「りようすけ」

今度は、はっきりと聞こえた。俺はゆっくりと目を開けた。視界がぼやけて見えたが、徐々にはっきりとしたものになってゆく。

そこには俺の知っている顔がずらりと並んでいた。泣き顔の母に姉、心配そうに俺を見つめる父や大学の友達。皆一様に俺を見下ろしていた。

「亮輔……目を覚ましたのね」

姉はそういって泣き出した。それに釣られてか、母も泣き出した。「……ニヤー」

どこからかネコの鳴き声が聞こえた。近いようで、遠いようなか細い鳴き声だった。

皆の後ろに、黒ネコがいた。黒ネコは笑顔で俺を見つめていた。

その黒ネコは、俺が身体を借りていたネコだ。どうやら他の者には、ネコの姿は見えず、鳴き声も聞こえなかったらしい。

（ごめんな。俺のせいで、お前を死なせてしまって。本当にごめん）俺は黒ネコを見つめながら、胸の中で何度も謝った。

黒ネコは再度鳴くと、俺に背を向け窓に向かって歩き出した。窓を突き抜け外へ出ると、ふわふわと漂いながら、茜色に染まる空へとけこむかのように消えていった。

そうさ、ネコは何ものにもとらわれず、勝手気ままにいけばいい。死んだってネコは猫だ。きつと、あの黒ネコはこの先もずっと、自由の世界を旅するのだろう。

俺は重い頭を起こすと、夕空に目を向けた。

「俺も、いつかネコみたいに生きてみたいものだな」

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3679c/>

ネコな一日

2009年3月24日10時10分発行